



Title	ジル・ドゥルーズの超越論的経験論の生成と構造
Author(s)	得能, 想平
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81980
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (得 能 想 平)

論文題名

ジル・ドゥルーズの超越論的経験論の生成と構造

論文内容の要旨

1. 全体の概要

本論文は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze 1925-1995)の最初の主著『差異と反復』の中心的教説である超越論的経験論の生成と構造を明らかにするものである。ドゥルーズは、しばしばポストモダンを代表する思想家と見なされてきた。その含意は論者によってさまざまであるが、共通するのは相対主義という特徴づけである。おのおのの個人の差異や変化を肯定する彼の哲学は、近代において自明とされてきた、すべての人間が理性の良き意志をもつという想定を批判する思想の一バリエーションとして広く参照されてきた。しかし近年、このような相対主義的な考え方は、自然や社会といった個人を超えて機能するものを前にして不十分である点も指摘されている。ドゥルーズ研究は、このような文脈のなかで、その思想の解像度を上げることが求められてきた。

超越論的経験論は、認識の原理と存在の原理の関係性の教説として理解されるものである。ドゥルーズによれば、観察者の観点そのものの構成に関与する「感覚されることしかできないもの」が観察者に対して与えられていると同時に、この「感覚されることしかできないもの」は存在者一般の生成変化を根拠づけるものでもある。認識と存在を直接的に結びつけるドゥルーズのこの謎めいた教説は、多くの研究者によって注目されてきた。

これまでのドゥルーズ研究において超越論的経験論は「崇高」モデルのもとで理解されてきた。ドゥルーズは、ヒューム、ベルクソン、ニーチェ、カント、スピノザに関するモノグラフの後に、『差異と反復』を出版したため、これらの哲学者との比較において論じられることが多かった。しかし、その際に見られる「崇高」モデルによる超越論的経験論の理解には不十分な点が見られる。

われわれは、「崇高」モデルによる理解を乗り越えるために、ジャン＝ポール・サルトルや同時代の著者からの影響を重視することになった。サルトルは、1943年に『存在と無』を出版し世界的に影響を与えたフランスの哲学者であり、ドゥルーズは、友人であったミシェル・トゥルニエとともに、ソルボンヌ大学時代に『存在と無』を熱狂的に読んでいたことが知られている。また、ドゥルーズは、ともにポストモダンを代表する思想家と見なされるミシェル・フーコーやジャック・デリダとは異なり、サルトルに好意的な言及を続けたことも知られている。それにもかかわらず、最初期の論考を除けば、ドゥルーズ哲学に対するサルトルの影響については見落とされてきたように思われる。本論文は、トゥルニエのサルトル論として読まれうる「非人称主義」や、ジャン・イポリット、マルシャル・ゲルー、ジュール・ヴェイユマンなどの同時代のアカデミズムの著者の議論を参照することで、超越論的経験論を異なる文脈において論じた点に特色をもつ。

また、われわれは、モノグラフ以前のドゥルーズの最初期論考の超越論的経験論に対する影響を強調した。『書簡 その他テキスト』(2015)が出版され、われわれはソルボンヌ大学の一学生であった1940年代のドゥルーズの議論に容易に触れることができるようになった。よく指摘されるように、この時代の論考は、若書きのもので、ジェンダー・ステレオタイプを前提とする議論を含むものである。しかし、われわれは、とりわけ「女性の記述」や「マテシス、科学と哲学」といった論考のうちに、『差異と反復』の中心的な教説である「超越論的経験論」のプロトタイプを見いだせることを指摘した。

われわれが「崇高」モデルによる超越論的経験論の理解に付け加えることは、二つの個体化の区別と「作品」制作の論点という二点である。

『差異と反復』の個体化には二つの水準を見いだすことができる。一方で、観察者の観点に与えられる事物の個体化の水準が存在する。これは目の前に現れる事物の生成変化をとらえる水準である。他方で、観察者の観点そのものの個体化の水準が存在する。これは、世界をとらえる観察者自身の生成変化をとらえる水準であり、『差異と反復』では「心的システム」として記述されるものである。われわれは、観察者の個体化のうちに事物の個体化があるという個体化の入れ子構造と呼べるものが『差異と反復』の教説の中心にあると指摘した。ドゥルーズはこのような着想をヴェイユマンの影響のもとで、「強度」に関する議論において導入していた。そして、超越論的経験論の「崇高」

モデルによる理解は、後者の観察者の個体化に関わるものであったことをわれわれは指摘した。

また超越論的経験論の終着点には「作品」制作の議論を見いだすことができる。これまでの研究においては、超越論的経験論による生成変化のプロセスの末に到達する「思考されることしかできないもの」がどのようなものであるかが、不明瞭なままであった。われわれは、『差異と反復』のプルーストや芸術に関する記述を参照することで、この「思考されることしかできないもの」が「作品」制作に関わっていることを指摘した。そして、われわれはこの「作品」制作という行為こそが、「永遠回帰」を通して、認識と存在の関係性を支えていることを指摘した。

2. 各章の概要

序論では、これまでの研究が超越論的経験論を理解する際に用いた「崇高」モデルの不十分さを論じた。「崇高」モデルとは、観察者の手前に、すべての事物の母体としての「理念」の世界を設定し、この「理念」の世界の直接経験の教説として超越論的経験論を理解するものである。われわれは、「崇高」モデルによる理解において、超越論的経験論の観察者の生成変化のみが注目され、事物そのものの生成変化（個体化）や超越論的経験論の存在論的射程を説明できない点を指摘した。

第一章では、マイケル・ハートの方法論を批判的に検討した。ハートによれば、ドゥルーズは、ヘーゲル主義批判という最初期の構想を実現するためにモノグラフを執筆し、その到達点として『差異と反復』の「存在論」を構築したとされる。ハートが提示するこのようなドゥルーズ哲学の発展のイメージは、超越論的経験論の「崇高」モデルによる理解において暗に前提とされているように思われた。われわれは、ドゥルーズの初期の書評「ジャン・イポリット『論理と実存』」(1953)を分析するなかで、ドゥルーズがヘーゲル主義批判というよりも、むしろ「意味の存在論」の構築を構想していることを指摘した。「意味の存在論」とは、感性的なものとしての「差異」と、悟性的なものとしての「思考」が与えられた人間が、大文字の《存在》を捉えるにあたって、前者の「差異」を優先すべきであるという考え方である。われわれは、このようにしてモノグラフの出版以前の段階においてすでに『差異と反復』へとつながるドゥルーズの着想が定まっていたことを示し、モノグラフ以前の最初期テキストの相対的重要性を指摘した。

第二章では、ドゥルーズ自身が最初期テキストにおいてその影響を認めているミシェル・トゥルニエの「非人称主義」(1946)をその文脈とともに分析した。トゥルニエはガブリエル・マルセルと対比される意味での「唯物論的な」サルトル主義の立場をとり、最も高次の存在者が他のすべての存在者の原因をなすという意味での垂直的因果性という構想をもって、「可能世界」概念を論じていたことを明らかにした。これは、即自存在における対自と対他の同時発生として捉えられる『存在と無』の形而上学に対して、対自に対する対他（可能世界）の先行性を主張するものとまとめることができる。

第三章では、「女性の記述」(1945)、「マテシス、科学と哲学」(1947)を中心にドゥルーズの最初期テキストを論じた。このなかで、ドゥルーズはサルトル的な現象野において相関する二つの極として「男性」と「女性」を論じていた。ここで「男性」とは、私を疎外する「可能世界の表現」であり、対他に対応する。また「女性」とは、私の固有性に関わる出来事を表現する行為の対象にならないディティールであり、対自の発生を表現するものである。ドゥルーズはとりわけ「マテシス、科学と哲学」の「共犯性」という概念を用いて、私の固有性と「可能世界の表現」とのあいだに密接な関係を示唆していた。われわれは、この点に、超越論的経験論のプロトタイプが見られると考えた。

第四章では、ヒュームを扱ったドゥルーズの最初のモノグラフである『経験論と主体性』(1953)に見いだされる存在論を論じた。モノグラフ期において、サルトル的な語彙は、アカデミックなカント主義的な語彙に置き換わることになるが、ドゥルーズが哲学者を読み解く大枠には変化がない。ドゥルーズは個体そのものの特徴を生気ないし情念の原初的な配分と同一視し、想像力におけるその反響において「実践理性」の発生を説明したのち、このような生気の配分原理が「存在論」において見いだされることを示唆する。このような議論は、即自存在における対自と対他の発生の議論をヒューム哲学に基づいてやり直すものであり、われわれは、モノグラフを読解するうえで、最初期テキストの問題設定を踏まえることが重要であることを指摘した。

第五章では、『差異と反復』に影響を与えたことが指摘されていたマルシャル・ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』(1931)の議論を紹介し、その思想史的意義を論じた。超越論的経験論に対する影響は相対的に大きいとは言えなかったが、無限悟性からの時間と空間を介したパースペクティブの発生を論じる議論の構成は、実存主義的な問題設定と通底するものであることを指摘した。

第六章では、『差異と反復』における超越論的経験論を考えるうえで、既存の研究の議論を改めて整理しなおし、以降の議論と関わる四つの論点を見いだした。超越論的経験論は再認可能な諸事物に帰着される「感覚されることしかできないもの」の直接経験を認める立場であり、一見すると反合理主義的なものにも思われる。われわれは、この「感覚されることしかできないもの」をめぐる先行研究において示唆されていた、批判対象とみなされる同一性、

観察者の行為を可能にする習慣、感覚されることしかできないもの「精錬」させる知、絶対的なものとしての作品という四つの合理性の区別を抽出し、次章以降の準備を試みた。

第七章では、ジュール・ヴェイユマンの『カントの遺産とコペルニクスの転回』(1954)と『差異と反復』を強度の考え方に関して比較するなかで『差異と反復』の個体化について論じた。ヴェイユマンが取り出した強度の考え方は、いわゆる「物自体」が無限小として観察者に内在することを認めたうえで、与えられた現象の質に対して、観察者の観点とは区別される事物自体の空間化可能性を認める議論である。ドゥルーズは、このようなヴェイユマンの考え方を引き受けつつも、「強度」を観察者の無意識のうちに位置づけ、習慣の総合の対象と見なしていた。ドゥルーズは、このような強度の考え方に基づいて、観察者に与えられる事物の個体化と観察者そのものの個体化を区別して論じており、後者の個体化が超越論的経験論に関わることを指摘した。

第八章では、『差異と反復』の記述を参照しながら、超越論的経験論のおおのの段階をブルースト『失われた時を求めて』のエピソードと並行的なものとして論じ、超越論的経験論の行先に作品制作があることを論じた。われわれは、観察者の観点に与えられた「可能世界」のあり方の変化に伴って超越論的経験論の段階が進展すること、最後の「思考されることしかできないもの」の段階は、「問題」を取り集める作品制作によって「問い」を変化させることで、観察者自身の個体化を進展させるものであることを指摘した。

本論文は、終章において、超越論的経験論が個人の異なる観点を認めるという意味では相対主義的なものであるものの、二つの個体化のいずれの観点においても、客観的实在の複数性を認めるものではないことを指摘した。ドゥルーズの超越論的経験論は、おおのの個人に対して現れるものすべての实在性を担保する教説であると同時に、サルトル＝カント主義的な枠組みのうちに、ライプニッツの「十分な理由の原理」の再導入を行うものとまとめることができる。本論文はこのことを結論とした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (得 能 想 平)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	檜垣 立哉
	副 査	教 授	村上 靖彦
	副 査	教 授	藤川 信夫

論文審査の結果の要旨

得能想平氏の博士論文は「ジル・ドゥルーズの超越論的経験論の生成と構造」と題され、フランスの現代哲学者であるジル・ドゥルーズの前期の哲学を特徴づける「超越論的経験論」が十全に展開される『差異と反復』以前にどのような議論を経て形成されたかを辿るものである。その過程において、従来軽視されがちであったフランスの20世紀中期の哲学史的地位を明確にし、それをバックボーンとしてドゥルーズの思考が形成されてきたことを浮き彫りにさせるものといえる。そのなかで、ドゥルーズ最初期のモノグラフ期のさまざまな議論についての検討がなされていること、そこでのサルトルの非人称主義や、カントの解釈の仕方、また充足理由律から「強度」の概念を探ることがおおきな枠組みとしてとりだされてきていることは評価しうる。

本書は序論と八つの章に分かれ、それぞれにおいて以下のような検討がなされている。

第一章においては、ドゥルーズのモノグラフ期を「反ヘーゲル主義」とまとめるマイケル・ハートの解釈が批判され、むしろ哲学史家イポリットの問題系との連関が強調される。第二章においては、ドゥルーズの親しい友人であり、ドゥルーズ自身が論じる対象でもあるミシェル・トゥルニエが、ガブリエル・マルセルとの対比においてとりだしてくる独自のサルトルの主張が論じられ、そこでとりだされたサルトルの非人称主義がドゥルーズに与えた影響が示される。

第三章では現状確認されているドゥルーズの最初期の論考である「女性の記述」「マテシス、科学と哲学」についての議論がなされた。最初期文献であるこの論考はきわめて読解に難しいものでありながら、後のドゥルーズの議論に繋がる多くの要素が含まれている。氏はそれらについて、従来検討されてこなかった「男性」的な「チーム」という発想を批判する視点をとりだしてきている。

第四章では、ドゥルーズの最初の著作であるヒューム論『経験論と主体性』が論じられ、そこで「合目的性」という概念とカント主義とのかわかりが検討された。第五章については『差異と反復』に影響を与えたといわれる、マーシャル・ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』が検討され、その思想史的意義が論じられた、マイモンは、ドゥルーズの理念論においておおきな役割を果たしており、その意味での貢献がかいまみられる。

第六章では『差異と反復』における超越論的経験論のあり方について、現代の諸解釈において重要な論点が整理された。そこでは「感覚されざるもの」の議論が重要視され、以降の記述に対して方向性を与えるものとなっている。第七章においてはジュール・ヴィユマンの『カントの遺産とコペルニクスの転回』がとりあげられ、ドゥルーズの『差異と反復』における個体化論への接近が提示される。ここにおいて感覚の「強度」とされるものがどのようにドゥルーズにおいて取りこまれたかが検討されることになる。そして第八章においては、『差異と反復』に直接記述されているプルーストに関する記述が分析対象にされ、プルーストの世界を考えることから提示される「可能世界」「作品」という諸概念についての検討が果たされた。

以上の議論を通じて超越論的経験論についてそれを構成する諸要素がどのようなかたちで提示されてきたかについて論じられ、強度、パースペクティブ、個体化＝作品制作を軸としたドゥルーズの超越論的哲学の構想や枠組みを規定するさまざまな議論がまとめられ、そこにサルトル、カント、ライプニッツ議論がおおきな役割を果たしていることがみいだされたといえる。

本論文の特徴は、第一に、『差異と反復』における最重要概念である「超越論的経験論」がどこからいかに構想されたのかについて、ドゥルーズの初期論考、ドゥルーズが若い時期におかれていた哲学史的地位、そこでこれま

で十分には取りあげられてこなかった様々な作品と向き合い、それをさまざまな角度から検討しつつ、サルトル、カント、ライプニッツという古典的哲学のある種の枠組みのなかで解明されうる道を開いたという点にある。とりわけドゥルーズ初期において彼がおかれていたフランス思想史の論脈のなかでのドゥルーズの議論の形成について整理がはたされたことは特筆すべきであるが、なおこれらの成果を『差異と反復』そのものの読解と直接的に結びつける課題が残されてはいるだろう。

論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。